

文学作品にあらわれた師弟関係と親子関係の研究

—— 芥川龍之介の作品の場合 (1) ——

伊 佐 治 大 陸

**Teacher-Student and Parent-Child Relationships
appeared in Literary Works : Ryunosuke Akutagawa (1)**

Tairiku ISAJI

I 問 題

教育と学習のいとなみは、教える人と学ぶ人があって初めて成立する。教える人と学ぶ人が同一人物という特殊の場合は別として、ほとんどの場合、教育と学習のいとなみは両者の人間関係を通して展開される。

ところで、今日、教育と学習の問題は、知識・技能の授受として取りざたされ、知識・技能をめぐって扱われることが多い。つまり、知識・技能をどれだけ、どのように教えたか（あるいは学んだか）とか、その結果の評価はどうなのかなどをめぐって問題にされることが多い。そこでは、教える人と学ぶ人の人間関係があまり考慮されてはいない。

しかし、人間としての成長・発達ということを考えた場合、真の教育と学習は、知識・技能の授受よりも、むしろ教える人と学ぶ人の人間関係そのものの中で、その人間関係にかかわって展開されるものだと言えないであろうか。

II 目 的

そこで本論では、教える人と学ぶ人の人間関係として、師弟関係と親子関係について検討することとする。師弟関係において、師は教える人として教師・先生・先輩などを含み、弟は学ぶ人として学生・生徒・後輩などを含むものとする。人間としての成長・発達を考えた場合、師弟の人間関係において、師は弟に何を教えようとしたのか、あるいは逆に、師は弟から何を学んだか、また、弟は師から何を学んだか、何を学ぼうとしたのか。そして、師弟の間の、意図されなかった見えざる教育と学習は何であったか。これらのことを検討し、明らかにすることが本論の目的である。同様のことを、親（父・母）と子（息子・娘）の間の親子関係についても検討することとしたい。

師弟や親子の人間関係を通して、その中では多様な教育と学習が展開される。それは、単に知識・技能の面だけではなく、生きた人間の生き方にかかわる教育と学習として展開される。このような教育と学習の内容を明らかにすることとしたい。

III 方 法

ところで、多くの文学作品は、その中で多様な生きた人間関係を扱っている。そこで以上述べた問題と目的を具体的に検討していく方法として、文学作品の中で扱われる人間関係に注目

し、ある作家が特にどのような師弟関係と親子関係をその内容として取りあげているのか、そしてその作家の師弟観と親子観が一体どんなものであるかについて分析することとする。しかし、本論は作家研究そのものが目的ではなく、作家の作品を素材として、作品中の師弟関係と親子関係の中で展開される生きた教育と学習の内容を検討するのが目的である。

ある作家の作品が全て師弟関係あるいは親子関係を主題とする作品である訳ではない。たとえば恋愛を主題とする作品の中でも、部分的に師弟関係あるいは親子関係にふれている作品がある。そこで、ある作家のほぼ全作品に目を通し、その中から師弟関係と親子関係について描かれている部分をできるだけ忠実に析出し、それらについての分析と総合を試みることにする。

文学作品に登場する人間関係においては、特殊な状況や異常な状況・極限状況の下での師弟関係や親子関係が多いかもしれない。しかし、そのような状況下での師弟関係や親子関係にあっては、却って重要な教育と学習の内容が浮かび上がるのではないかと思われる。

まず今回は、研究のための一素材として芥川龍之介の作品を取り上げることとした。

Ⅳ 内 容

(1) 量的分析

芥川龍之介は短篇を得意とする作家と言われており、「羅生門」から「或阿呆の一生」(遺稿)に至るまで、数多くの作品を残している。筆者は文庫本に収められている約150の作品(龍之介の全作品の約9割に当たる)に目を通した。その中で、なんらかの表現で、師弟関係・親子関係についてふれている作品は、全体のほぼ5分の2に相当する61作品であった。龍之介は師弟関係と親子関係について、量的には決して多くの作品でふれているとはいえない。しかしこの61作品について、まず量的分析を行なうこととする。

次の表は、61作品の中で師弟関係あるいは親子関係の内容が一文脈としてあらわれた頻度を数量化したものである。T→Sの欄は、師弟関係において、師から弟へ向かう関係を表わしている文脈が作品中に何回出てくるかを頻度で示している。——T→S関係(Tは teacher, Sは student を指す)

T←Sの欄は、弟から師へ向かう関係を表わしている文脈が作品中に何回出てくるかを頻度で示している。——T←S関係

ただし、同一の文脈の中で、師弟の相互関係(T↔S関係)を表わしている内容の場合は、T→Sの欄とT←Sの欄の双方に頻度得点に加えてある。

親子関係のP→Cの欄(P→C関係)、P←Cの欄(P←C関係)についても、同様に頻度が示してある。(Pは parent, Cは child を指す)

表1 作品中にみられる師弟関係と親子関係の頻度

年 号 年 齢	作品 番号	作 品 名	師 弟 関 係			親 子 関 係		
			T→S	T←S	計	P→C	P←C	計
1914~16年 22~24歳								
1917年 (大正6)	1	運					2	2
	2	偷盗				8	3	11

25歳	3	戯作三昧				1	1	2
	4	貉					3	3
	5	二つの手紙		1	1			
1918年 (大正7) 26歳	6	首が落ちた話					1	1
	7	西郷隆盛	2	2	4			
	8	世之介の話				1		1
	9	地獄変				7	2	9
	10	開化の殺人				2		2
	11	奉教人の死				2		2
	12	枯野抄	1	11	12			
1919年 (大正8) 27歳	13	邪宗門				7	2	9
	14	路上					2	2
	15	入社辞	2		2			
1920年 (大正9) 28歳	16	東京小品				3		3
	17	舞踏会				2	1	3
	18	秋				1	1	2
	19	杜子春	6	3	9	2	4	6
1921年 (大正10) 29歳	20	雑筆				2	2	4
	21	往生絵巻				1		1
	22	山鳴		2	2			
	23	奇怪な再会				1		1
	24	アグニの神					1	1
1922年 (大正11) 30歳	25	母				2		2
	26	藪の中				2		2
	27	將軍				1	1	2
	28	トロッコ					1	1
	29	報恩記				2	4	6
	30	六の宮の姫君				2	3	5
	31	お富の貞操				1		1
	32	百合				1	1	2
	33	わが散文詩				1	2	3
	34	庭				1		1
35	おぎん				1	2	3	

1923年 (大正12) 31歳	36	あばばば				1		1
	37	保吉の手帳から	6	1	7			
	38	子供の病気	1	1	2	4		4
	39	お時儀	1		1			
	40	伝吉の敵討ち				1	6	7
	41	雛				5	5	10
	42	二人小町				3	1	4
	43	おしの				2		2
1924年 (大正13) 32歳	44	一塊の土	1		1	2	1	3
	45	少年				5	9	14
	46	第四の夫から				1		1
	47	文章	2		2			
	48	十円札	1	2	3			
1925年 (大正14) 33歳	49	大導寺信輔の半生	2	2	4	3	9	12
1926年 (昭和1) 34歳	50	年末の一日		2	2			
1927年 (昭和2) 35歳	51	玄鶴山房				1	2	3
	52	河童				3	3	6
	53	たね子の憂鬱					1	1
	54	本所両国	1	3	4	2		2
	55	機関車を見ながら				2	2	4
(遺稿)	56	闇中間答		1	1	2	1	3
	57	侏儒の言葉				10	4	14
	58	歯車	1	1	2	4	4	8
	59	或阿呆の一生		1	1	1	1	2
	60	西方の人	1	1	2	1	1	2
	61	続西方の人				1		1
計			28	34	62	108	89	197

表1 から少なくとも以下のことがらを推察することができる。

1. 師弟関係の約3倍を親子関係について扱っている。
2. $P \rightarrow C$, $P \leftarrow C$, $T \rightarrow S$, $T \leftarrow S$ の比率はおおよそ $4:3:1:1$ であり, $P \rightarrow C$ 関係について最も多く扱っている。
3. 龍之介の20代を前期, 30代を後期とすると, 師弟関係については前・後期ともにほぼ同じ量で扱っている。親子関係については前期の約2倍を後期で扱っている。

4. 龍之介の作品中、師弟関係についてふれている代表的なものを6つあげるとすれば、「西郷隆盛」「桔野抄」「杜子春」「保吉の手帳から」「大導寺信輔の半生」「本所両国」である。
5. 親子関係についてふれている代表的な8つの作品をあげるとすれば、「偷盗」「地獄変」「邪宗門」「雛」「少年」「大導寺信輔の半生」「侏儒の言葉」「歯車」である。
6. 師弟関係と親子関係の双方を扱っている代表的な4作品は、「杜子春」「大導寺信輔の半生」「本所両国」「歯車」である。

(2) 師弟関係の内容分析

龍之介の作品に描かれている師弟関係の内容を分析・検討するために、表1の頻度に示されているおのおのの文脈をできるだけ忠実に生かしながら、作品毎にその内容を凝縮する作業を行った。凝縮できないものは、それをひとまとまりの内容とした。そして、 $T \rightarrow S$ 関係の内容、 $T \leftarrow S$ 関係の内容、 $T \leftrightarrow S$ 関係の内容(同時にTとSの双方にかかわりのある内容のもの)という3つのグループに分類してみると、表2の結果が得られた。

表2 作品中にみられる師弟関係の内容分類

作品番号	$T \rightarrow S$	$T \leftarrow S$	$T \leftrightarrow S$
5		1	
7			1
12	1	1	
15	1		
19	3	2	
22		1	
37	3		1
38			1
39	1		
44	1		
47	2		
48		1	1
49			2
50		1	
54		1	1
56		1	
58		1	1
59		1	
60	1		
計	13	11	8

以下の内容分析は、この表2に基づいて、各グループ毎にその内容を検討する。作品番号は表1のそれと対応している。Aの部分は、作品に描かれている師弟関係の内容のできるだけ忠実な要約であり(用いている漢字は作品中のそれとすべて同じ)、Bの部分はその内容にこめられた龍之介の意図に対する筆者の解釈である。

なお表3は、TとSの関係において男女の別(mは男、fは女を指す)がどうなっているかを示している。表3からわかるように、龍之介の作品に描かれる師弟関係では、師も弟も男がほとんどである。女の師、女の弟が描かれている内容は皆無に近い。(女教師と女生徒の関係が描かれているのはただ一個所のみ)

表3 作品中にみられる師弟関係の男女別

		$T \rightarrow S$	$T \leftarrow S$	$T \leftrightarrow S$
1	T - S			
2	T - S(m)	1		
3	T - S(f)			
4	T(m) - S	6	1	2
5	T(f) - S			
6	T(m) - S(m)	6	9	6
7	T(m) - S(f)			
8	T(f) - S(m)			
9	T(f) - S(f)		1	
計		13	11	8

<a> T→S 関係の分析

作品12 T(m)→S(m)

A 師匠は弟子たちに何度も礼を言った。「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分だと思ったが、こう言う美しい蒲団の上で、往生の素懐を遂げることが出来るのは、何よりも悦ばしい」。

B 偉大なる師といえども、その死に臨んでは、平安を愛する一人の人間である。師匠は、畳の上で弟子たちに見守られながら息を引取ることができるのが嬉しかったのだ。

作品15 T(m)→S(m)

A 彼は、教育家として、未来の海軍将校を陶鑄すべき教育家として然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸薬のごとく服膺できない点だけでも不良教師である。が、彼は生活のために、怪しげな語学の資本を運転させて、教育家らしい店構えを張り続ける覚悟でいた。しかし、今度新聞社への転職のため、この不良教師が辞職することになったのは帝国海軍のためにも祝福すべきことである。

B これは師弟関係というよりはむしろ、海軍士官学校を辞職することになった教師の一教師観を表明している。時代背景がどうであれ、教師観には人それぞれのものがある。ここでは、不良教師ということばに官許教育方針への皮肉がこめられている。すなわち、より人間的な観点から言って、官許の教育は本来の教育からはかけ離れたものなのかもしれない。

作品19 T(m)→S(m)

A 貧乏で困っている杜子春に、老人は「おれが好いことを一つ教えてやろう」と言って、車一ぱいの黄金が埋まっている場所を教えた。老人の言葉通りに一山の黄金を手に入れて、彼は洛陽唯一の大金持になった。が、彼はお金を使い果たしてしまった。老人は再び彼に黄金のありかを教えた。それもまた使い果たして、彼はふり出しの貧乏に戻った。老人は三たび黄金のありかを教えようとした。すると彼は「いや、お金はもういらぬのです」。老人、「では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」。

B 老人は、お金の空しさをいやが上にも味わわせ、実地教育によって一つの教訓を学ばせようとしたのだ。「それはつまらないことだ」、「あれはむだなことだ」と言うよりも、まず飽きるまでやらせることである。経験させることすなわち教育であり、経験することすなわち学習である。

作品19 T(m)→S(m)

A 仙人、「いかにもおれは仙人だ。二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう。いくらおれの弟子にしたところで、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第でまゐることだからな」。こう言って、彼を竹杖に乗せ、峨眉山の奥へ連れて行った。

ある日仙人が天上へ出かけることになり、彼にその帰りを待つように命じた。「おれがいなくなると、いろいろな魔性が現われて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえどんなことが起ころうとも、決して声を出すのではないぞ。口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだ」と覚悟をしろ。天地が裂けても、黙っているのだぞ」。彼は黙っていることを約束し、仙人は安心して天国へ出かけた。

B 真の師弟関係が成立するためには、まず弟子自身が自らの力で師のレベルに近づこうとする意志がなければならない。そして師から学ぶためには、忠実に師の言葉を守ることである。

作品19 T(m)→S(m)

A 仙人はもし彼が黙っていたら、彼の命を絶つつもりだった。仙人は、大金持になる望み、仙人になる望みを捨てることを教えた彼に尋ねた。「ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」。

彼、「何になっても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです」。

仙人、「その言葉を忘れるなよ」。

二人は再び会うことはなかった。

B 教育は体験からと言われるように、仙人は、彼に体験を通して人間の道を教えたのだ。

作品37 T(m)→S

A 彼はパンのために教師になった。彼は友人の西洋人教師に、教師という職業の退屈さについて話した。西洋人教師曰く、「教師になるのは職業ではない。むしろ天職と呼ぶべきだ。You know, Socrates and Plato are two great teachers……etc.」。彼は、「ソクラテスとプレトオをも教師だった」と述べたその友人に感心した。

B この内容は師弟関係よりも、むしろ一つの教師観を表わしている。教師の教育するという職業は、「生活のため」だけでは行なえるものではない。人を教えるということは大変なことである。パンだけのために教師をする者はみじめである。

作品37 T(m)→S

A 彼は授業の前に必ず教科書の下調べをした。それは、月給を貰っているから出鱈目なことではできないという義務心と生徒の前で誤訳をして恥をかかないためだった。

B 教師は、自らを守るという自尊心のためにも、授業の前には教科書の下調べをすべきだ。ここでは、すべての教師が自分の職業を天職と考えて情熱を燃やしているわけではない——とする暗に教師に対する批判もこめられている。

作品37 T(m)→S

A 生徒の誤訳を後で訂正したりするのは、彼には面倒だった。彼は授業の途中で訳読を中止させ、今度は自分で読んで訳した。が、彼の教えぶりもまた退屈であった。

B 英語の教師が授業で悪文の英文を訳読したり、生徒に訳読させたりすることほど退屈なものはない。ここでは、教える側も学ぶ側も授業に対して受動的態度をとっており、どちらも訳読のこの一時間は自らのものであるという積極さがまるでみられない。

作品39 T(m)→S

A 革命的精神に燃える英語教師の彼は、どんな権威にも屈しなかった。が、一度だけ、ある顔馴染みのお嬢さんにうっかりお時儀をしてしまったことがある。

B ついふと、普通の人間らしさを見せる教師は面白いものだ。

作品44 T→S(m)

A 「ねえ、おばあさん。おらのお母さんはうんと偉い人かい？」

「なぜや」。

「だって先生がの、修身の時間にそう言ったぜ。広次のお母さんはこの近在に二人とない偉い人だって」。

「先生がの？」。

B 先生は広次という生徒に彼の母親が立派な人であることを教えようとしたのだ。逆に、この会話の中に、社会的評価の高い先生の存在、先生に対する二人の尊敬の念を十分読み取ることもしよう。

作品47 T(m) → S

A 彼は英語の教師をしている。が、それを本職だとは信じていない。創作を一生の事業と思っている。

B これは師弟関係というよりも一つの教師観である。教師をやりながら、それを本業だと思っていない教師もいる。

作品47 T(m) → S

A 校長は、教師の彼が代わりに作った弔辞をまことらしく読み上げた。校長は「君、資性頼悟兄弟に友に」と読み続けた。

B いいかげんな校長もいるものだ。教師は、同職であり上司でもある校長に尊敬の念をいだけなくなる。ひいては自らの職業への侮蔑にもつながるであろう。そして教師の教育への不信感は生徒へも伝わっていくであろう。

作品60 T(m) → S(m)

A クリストは、「我まことに汝らに告げん。もし改まりて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」と弟子たちに教えた。クリストは彼自身幼な児に近かった。それは精霊の子供だった彼自身の立場でもあった。「幼な児のごとくあること」は幼稚園時代にかえることである。この教えは、誰かの保護を受けなければ人生に堪えないもののほかは黄金の門に入ることとはできないということである。

B 師も弟子も自分一人で立つことはできない。師も弟子も幼な児のようであるべきだ。

 T ← S 関係の分析

作品5 T(m) ← S(m)

A ある師の妻に不品行の諷が立った。彼が教えている学生は、彼の講義を真面目に聴かなくなったのみでなく、教室の黒板に「めでたしめでたし」などといたずら書きをした。

B 学生は何かと教師にいやがらせをしたがるものである。教師自身の不始末ではなく、その妻の不品行が学生の教師に対する評価に響くということは、絶対者としての教師への学生の期待とねたみが反映していることでもある。

作品12 T(m) ← S(m)

A 何人かの弟子たちが、師匠の芭蕉との死別のなごりを惜しんでいる。ある弟子は師匠との別れはさぞ悲しいものだろうと思っていたが、実際にその場に及ぶと、その心もちは冷淡に澄みわたった。のみならず、致死期の師匠の不気味な姿は、烈しい嫌悪の情を起こさせた。あ

る弟子は死んでいく師匠を見ながら、満足と悔恨との不思議に錯雑した心もちを味わった。重病の知らせを聞いてかけつけ、師匠の看病を一日も怠らなかったある弟子は、万事万端の世話の中心役を果たした。彼は、自分が師匠に仕えるのは親に仕える心算と同じだとして、孝道の義を説き、自らそれを実践したのである。ある弟子は死別の悲しさではなく、次に死ぬものは自分ではないかという恐怖に襲われた。ある弟子は師匠の死に面して、限りない悲しみと限りない安らかな心もちとを同時に感じた。安らかな心もちとは、先達の芭蕉の人格的圧力に屈し続けてきた彼の自由な精神が、手足を伸ばそうとする解放の喜びであった。

B 師の存命中に保たれていた厳しい師弟関係は、師の他界を契機に崩れようとしている。弟子にとって、師弟愛よりも自己愛が切実であり、師弟愛から人間のみにくさへとさえ変化しようとしている。弟子たちは皆、枯野に窮死しようとする先達の最後を歎くのみでなく、師匠を失う自分たち自身を悼んでいるのである。同時に、余りに偉大な師を持ってしまった弟子たちの、師の他界の後に生きて師を乗り越えなければならないとする重々しい宿命が表明されている。

作品19 T(m)←S(m)

A 老人、「若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮らして行くつもりか」。

彼、「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になって、仙術の修業をしたいと思うのです。あなたは道德の高い人でしょう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です」。

彼は、老人に先生として仙術を教えて呉れるよう乞うた。

B 時には、百万の忠告より一つの行為がその人を目覚めさせるのであり、それを教えてくれた人を師とあがめるものである。それも師と弟子の双方にお互いを解する心があることである。

作品19 T(m)←S(m)

A 口を利くなという仙人の戒めを守って、彼はどんなことがあっても啞の如く黙っていた。悪魔が現われて、彼の父母を苦しめても、眼をつぶりながら必死に約束を守っていた。しかし、あまりの切なさに仙人の戒めを忘れて、とうとう彼は叫んでしまった。

「お母さん」。

B 例え師とたてまつる人の教えであろうと、理不尽なことは弟子にできるものではない。より人間的な感情は教育に先んずるものである。

作品22 T(m)←S

A トルストイ、「村の子供たちはおもしろいよ。ああいう連中の言葉を聞いていると、思いもつかない直截な言いまわしを教えられることがある」。

村の子どもたちを教えていて、彼はある子供から、「白墨を欠きに行く」という表現を学んだ。

彼、「こういう言葉が使えるのは、現に白墨を噛んでいるロシアの子どもがあるばかりだ。我々おとなにはとうていできない」。

B 教師が生徒から学ぶことも多々ある。師も弟子もともに歩きながら、双方ともに教えたり学んだりするのである。

作品48 T(m)←—S(m)

A 彼は同僚のK先生の語学的天才に敬意を抱いている。しかもK先生はいかにも長者らしい寛厚の風も具えている。英語の教科書の難解な個所について、彼はいつもK先生に教わりに行った。

B 教師と生徒の間のみでなく、先生同士の間にも師弟関係は存在する。

作品50 T(m)←—S(m)

A 彼は滅多に先生の墓参りをしたことがなかった。K君は丁寧に墓へお時宜をしたが、彼は今更恬然とお時宜をする勇氣は出悪かった。

「もう何年になりますかね？」

「丁度もう九年になる訳です」。

B 亡くなった師への墓参りに、弟子が時々出かけたりするのはなかなか出来ないものである。たとえ師の墓にお辞儀をしないにせよ、弟子の心にはいつも師の姿が宿っているのである。

作品54 T(m)←—S(m)

A 昔教えて呉れた先生たちのことが、彼の記憶に浮かんだ。A先生は第三中学校の剣道部の先生で、その剣道は封建時代の剣客にも劣らなかった。先生は食物を減じ、仙人に成る道も修業していて、彼はその鍛煉に敬意を感じていた。彼は、B先生に張り倒されたこと、C先生に後頭部を突かれたこと、D先生に……等を憶えている。

B 昔を振り返ってみて思い出される先生には、良しにつけ悪しきにつけ何かの特徴があるものだ。その先生に教えてもらっていた学科内容よりも、むしろその先生の人となりや行動と結びついて記憶に残るのである。

作品56 T(m)←—S(m)

A ある声「お前はそれでも夏目先生の弟子か？」

僕「僕はもちろん夏目先生の弟子だ。お前は文墨に親しんだ漱石先生を知っているかも知れない。しかし、あの気違いじみた天才の夏目先生を知らないだろう」。

B 彼の先生は気違いじみた天才であった。師の偉大な業績だけでなく、師の人間的な面をよく知ってはじめて弟子といえるのである。

作品58 T(f)←—S(f)

A 十二・三の女生徒は若い女教師の膝の上に坐り、時々話しかけていた。「かわいいわね、先生は。かわいい目をしていらっしゃるわね」。女生徒というより一人前の女という感じがうかがわれた。

B 女生徒と女教師は親しい人間関係で結ばれている。厳しい師弟関係には程遠く、むしろ友人関係の面が強い。女生徒は一人前の女として女教師に接している。

芥川龍之介の作品中、女教師と女生徒の師弟関係の描写が出てくるのはこの個所一つのみである。しかも、それは師弟関係というよりは、同等の女性として描かれている。

作品59 T(m)←—S(m)

A 彼は、「センセイキトク」の電報をポケットに押しこんだまま、歓びに近い苦しみを感

じていた。

B 師を失うことは、弟子にとって、柱を失う悲しみと桎梏からの解放の喜びの二つを意味する。

<c> T \leftrightarrow S 関係の分析

作品7 T(m) \leftrightarrow S(m)

A 車中で学生が老紳士と乗り合わせた。二人の会話がはずみ、学生は卒業論文で西郷隆盛の「城山戦死説」に取り組んでいることを話す。実はこの老紳士、ある大学の教師であった。学生は途中でそのことを知って失礼なふるまいを詫びた。老紳士は始終何かに微笑を送っているような朗然とした眼つきをしている。が、すこぶる懐疑的な考えの持ち主である。学生は、「先生はスケプティックですね」と言った。老紳士は答えた。「僕はピルロンの弟子でたくさんだ。我々は何も知らない。まして西郷隆盛の生死をやです」。

B ほんの行きずりの教師と学生との関係ではあるが、学生は老紳士からもっとスケプティックになるべきことを学んだのだ。自信にあふれた教師からよりも、学生は懐疑的な態度の教師から学ぶことの方が多いのかもしれない。

作品37 T(m) \leftrightarrow S

A 彼は授業で教科書の中の悪文を生徒に訳読させていた。それには彼自身が退屈した。こんな時彼は生徒を相手に思想問題や時事問題を弁じたい気分が駆られる。元来、教師は学科以外の何ものかを教えたがるものである。が、生徒というものはそれを教わりたがらないものである。彼は、だから退屈な訳読を進めるより他なかった。

B 教師は、自分の担当科目以外の何ものかを教えたがるものだが、生徒の方はそれを教わりたがらぬものらしい。しかし、ただ授業だからということでこのような退屈な状態を続けるとすれば、それは教師と生徒の双方にとって悲劇的である。そこには、双方に人間的なゆとりがみられない。自分が何を求めているか、何が大切なのか、という問いかけが双方になされていないのである。

作品38 T(m) \leftrightarrow S(m)

A 午後には見知らない青年が一人、金の工面を頼みに来た。自分は現在墓口に二・三円しかなかったから、不用の書物を二冊渡し、これを金に換え給えと言った。「この本は非売品と書いてありますね。非売品でも金になりますか?」。自分は情ない心もちになった。青年は、ありがたうとも何とも言わずに帰って行った。

B 金に困った青年は、師とあがめる作家の彼から、当然のこととして金の工面が得られるものと考えたのだろうか。師としての彼の青年に対する思いやりもこわれてしまった。このような師弟関係は即座に消えるのであって、決して二度と結ばれるものではない。

作品48 T(m) \leftrightarrow S(m)

A K先生はいつもやすやすと彼の疑問を解決した。K先生は彼の教科書を見てしばらく沈吟した後、卒然と天上の黙示でも下ったかの如くに「これはこうでしょう」と説明した。彼はこの芝居のために、語学的天才よりもこの偽善者たる教えぶりのために、K先生を尊敬した。

B 教師の才能・能力よりも教師の教えぶりや教え方にひかれてしまうものだということを皮肉っている。本当に人間的な自らに正直で謙虚な教師がうけないで、むしろ中身より教えぶ

りやゼスチャーに惑わされやすいということを皮肉っている。世間で良い教師といわれる人が必ずしも人間性豊かな人とはいいがたいということ。

作品49 T(m)←→S(m)

A 彼は中学時代の教師を憎んだ。教師は皆個人的には悪人ではなかったが、教育上の責任。殊に生徒を処罰する権利の故に暴君と化した。教師たちは、自らの偏見を生徒の心へ種痘するためには手段を選ばなかった。ある教師は「生意気だ」という理由で、彼に体刑を課した。ある教師は彼が武芸や競技に興味を示さぬことを喜ばず、「お前は女か？」と、嘲笑した。彼が、「先生は男ですか？」と反問したため、教師は彼の不遜に厳罰を課した。

B 教師は個人的には悪人でなくとも、教育上の責任から、生徒にとってしばしば暴君と化すものだ。権力を握ったものの暴君化はしばしば起こり得るものである。教師が自らを一つの権力として行使するのは危険であり、そこで行なわれる教育は、もはや教師の偏見や固定観念のみの伝達にすぎない。

作品49 T(m)←→S(m)

A 教師がみな彼を迫害した訣ではない。ある教師は家族を加えた茶話会に彼を招待した。ある教師は彼に英語の小説を貸した。が、教育上の責任は教師と人間同士の親しみを交える妨害をした。教師の好意を得ることに何か教師の権力に媚びる卑しさが潜んでいた。彼は教師の前では自由に振舞えなかった。時々彼は教師にわざと不自然な不作法をしたので、教師はこれを彼の不遜のためと解釈した。彼は意地の悪い質問を投げつけ、人の好い教師を悩ませることが愉快だった。彼は学業成績は抜群であったが、操行点が悪いいため三番以上にはなれなかった。こう言う復讐をする教師を彼は憎んだ。

B 教育上の責任は、教師と生徒の親しい人間関係を阻むものである。教育上の責任は教師の制度上の役割から由来するのであり、試験をしたり生徒の評価をしたりよくない生徒を懲戒したりすることを指している。しかし教育上の責任は教師という人間を通して生徒へと行使される。教師は教育上の責任をどのようにでも行使できる立場にある。教師と生徒の間に望ましい師弟関係が成り立つためには、教師は教育上の責任についてよくわきまえていなければならないのである。

作品54 T(m)←→S(m)

A 彼は作文の時間に彼の作品が一番になると信じていた。が、先生は「泰ちゃん」の作文を一番にした。「泰ちゃん」は先生の命令で自分の作文を朗読した。彼は「泰ちゃん」のためにもごと敗北を受けた。

B 先生に自分の力を認めて貰うために、生徒たちは競争をするものである。生徒は先生のちょっとした一声で、がっかりしたり敗北を感じたり、また得意になったりする。先生の評価は決して絶対的なものではない。しかしその評価は生徒の心に大きく残るのである。

作品58 T(m)←→S

A 先生、A先生——それは彼にとって不愉快な言葉だった。彼等は彼を先生と呼び続けていた。が、彼はそこに彼を嘲る何ものかを感じた。

B 先生呼ばわりされることは、時には、却ってそこに嘲笑や侮蔑を感じるものである。

(3) 親子関係の内容分析 (省略)

V 結 論

以上の内容分析の結果を総合して、芥川龍之介の作品に描かれた師弟関係の内実を把握し、本論での問題・目的に対する結論に代えることとする。

1 良き師弟関係の成立の条件

- (1) 良き師弟関係とは、師弟の間にお互いを解する心があり、師弟の双方が共に教えたり学んだりする関係である。師もまた弟から学ぶのである。
- (2) 弟は師の教えを忠実に受け入れると同時に、弟自らの力で師のレベルに近づこうとする意志を保持しなければならない。また、弟は、師の人間的側面をよく知って、初めて弟といえるのである。
- (3) 金銭関係で結びつく師弟関係は持続するものではない。
- (4) 師同士の間にもまた師弟関係は成立し得る。
- (5) 真の師弟関係は、師も弟も、自立できぬ幼な児のような気持ちになって、互いに助け合いながら学んでいくところに成立する。

2 師弟の間の良き教育

- (1) 百万の忠告より一つの行為が弟を目覚めさせるのであり、体験を通じた実地の教育によって、弟は一つの教訓を学びとる。実地の経験が、弟にとっては即学習である。体験によってこそ、師は弟に人間の道を教えることが可能である。
- (2) 師の教えであっても、理不尽なことは弟にできるものではない。弟にとっては、師弟愛の根底には自己愛があるのであって、人間的感情を無視した教育はあってはならない。
- (3) 本来の教育は、官許の教育によってはなし得ない。

3 良き師

- (1) 母を尊敬せよと弟に説く師、人間的で自らに正直で謙虚な師は良き師である。
- (2) ついふと普通の人間らしさを見せる師には魅力がある。
- (3) 女性同士の師弟の間では、厳しい師弟関係よりも、親しい人間関係がふさわしい。
- (4) ふり返って思い出される師には、その師の人となりや行動に何らかの特徴がある。
- (5) 弟は、懐疑的な態度で学問に接する師から学ぶことが多い。

4 授業中の師弟について

- (1) 師のわずかな発言が、良しにつけ悪しきにつけ、弟の心には大きく響く。
- (2) 師は自分の担当科目以外のことを教えたがるものだが、生徒はそれをききたがらぬものである。
- (3) 弟は、師の教える内容よりも、教えぶりやゼスチャーに惑わされがちである。
- (4) 退屈な授業は師弟の双方にとってみじめである。師も弟も、受身の態度で授業に臨むことがあってはならない。

5 師の職業観

- (1) 全ての師が自分の職業に情熱を燃やしている訳ではなく、それを本業とは思っていない師もいる。しかし、師は自己の生計だけのためから、教育するという職業を持続できるものではない。
- (2) 官許の教育方針を鵜呑みにすることのできない師、教育するという職業に不信感を抱く師もいる。

6 師の教育上の責任

個人的には悪人でない教師であっても、教育上の責任から、弟に対して暴君と化すことがある。教育上の責任は、師弟の親しい人間関係を時として阻みがちである。師は、教育上の責任についてよくわきまえていることが必要であり、弟への過度な権力行使に注意することが肝要である。

7 師への弟のいやがらせ

師への弟の期待とねたみから、弟は師にいやがらせをしたがるものである。また、過度な師呼ばわりには、却って弟の嘲笑や侮蔑がこめられている。

8 師弟の別れ

- (1) 弟に見守られながら死ぬことのできる師はしあわせである。
- (2) 師が他界しても、弟の心にはなんらかの形で師の姿が宿るのであり、余りに偉大な師を持ってしまった弟にとって、師の他界後の運命は苦しみですらある。
- (3) 師を失うことは、大きな柱を失う悲しみでもあり、これまでの桎梏からの解放の喜びでもある。

付 記

本研究は最初に述べたように、作家研究そのものが目的ではない。しかし、師弟関係についての内容分析を進めていくうちに、龍之介自身が一体どのような生い立ちを経たのか、どのような環境の下で作家生活を送ったのだろうかという問題に、筆者は興味をおぼえざるを得なかった。参考までにごく簡単に記すと、

(1) 彼が生後まもなくして引き取られた芥川家は、代々徳川家に仕えた旧家で、行儀作法の厳しい気風があったこと、(2) 養父芥川道章は南画・俳句によく親しむ人物だったこと、(3) 彼は5歳の時、幼稚園に通ったこと、(4) 彼は神経質でひよわな体質の子もだったが、小学生時代から学業成績優秀で、早熟の文才を示していたこと、(5) 特に、彼の漢文の力は抜群だったこと、(6) 彼が東京帝大英文科を卒業後、生活の糧を得るために、一時期(24~27歳)の間、海軍機関学校の英語の教官を勤めたこと、(7) 彼がまだ無名の青年だった時、夏目漱石の門下となったこと、(8) 師夏目漱石の死去を経験したこと、(9) 教官辞職(27歳の時)ののち、毎日新聞社社員となったこと——等々である。

以上のような生い立ちや環境は、龍之介の文学作品の中で展開される師弟関係の内容と照合している部分が多い。つまり、彼自身が体験の中で獲得した師弟観というべきものが、作品中の師弟関係の内容に大きく反映していると言えるのである。

筆者は更にこのような手法の研究を継続させ、芥川龍之介の作品の場合だけでなく、若干の他の作家の作品についても、同じような観点からの内容分析を試みたいと考えている。(なお芥川龍之介の作品にあらわれた親子関係の内容分析については、スペースの関係上掲載出来なかったため、他の機会に発表することとする。)

参 考 文 献

- 1 芥川龍之介 「羅生門・偷盜・地獄変」 角川書店(1950)
- 2 芥川龍之介 「羅生門」 春陽堂書店(1961)
- 3 芥川龍之介 「偷盜・戯作三昧」 角川書店(1963)
- 4 芥川龍之介 「舞踏会・蜜柑」 角川書店(1963)
- 5 芥川龍之介 「蜘蛛の糸・杜子春」 新潮社(1963)
- 6 芥川龍之介 「奉教人の死」 新潮社(1963)
- 7 芥川龍之介 「戯作三昧・一塊の土」 新潮社(1963)
- 8 芥川龍之介 「河童・或阿呆の一生」 新潮社(1963)
- 9 芥川龍之介 「藪の中・将軍」 角川書店(1964)
- 10 芥川龍之介 「少年・大導師信輔の半生」 角川書店(1964)
- 11 芥川龍之介 「トロッコ・一塊の土」 角川書店(1964)
- 12 芥川龍之介 「或阿呆の一生・侏儒の言葉」 角川書店(1964)